関連学会印象記

第27回日本TDM学会・学術大会に参加して

島　本　裕　子*

2010年6月26日，27日の2日間，北海道薬科大学の野村憲和学会長のもと，北海道札幌市で第27回日本TDM学会・学術大会が開催された(**写真1**)．本学会の第1回学術大会は，1984年，国立循環器病センターの講堂にてTDM研究会学術大会として開催され，その後1988年に日本TDM学会と名称を改めて以降，第27回目の学術大会を数える．本学会は，TDM(therapeutic drug monitoring)について広く研究および討議し医療に貢献することを目的としており，すなわち，個別化投薬の方法論を研究し，かつそれを普及させることによって，薬物における有効性ならびに安全性の向上をめざすものである．

本大会のメインテーマは「未来へのTDM」TDMの今後の方向性を示す，幅広い内容の講演・シンポジウムが企画された．特別講演は2演題あったが，特筆すべきは，Dr. Alexander A. Vinks (University of Cincinnati, Cincinnati Children's Hospital Medical Center)をお招きしての特別講演であった．演題名は「TDM in the Era of Personalized Medicine: the Future is Now.」とされており，講演内容としては薬物療法の個別化を行う際，以前は薬物を投与し，血中濃度を測定してから，投与量の調節など個別化を行っていたのに対し，今後は遺伝子情報やバイオマーカーなどから多くの情報を得ることで，より早い段階で個別化を行っていくことを推奨するものであった．また，これらの考え方は“pharmacomanagement”という言葉を用いて表現されていた．講演は同時通訳のない，英語でのものであったがDr. Vinksは日本人の聴衆が聞き取りやすいようにゆっくりと話されており，英語の苦手な筆者にはとてもありがたいものであった．

写真1　会場の札幌サンプラザ

*独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科

Presented by Medical*Online

また，今後の目標とすべき個別化のmanagementについてはそのイメージを分かりやすい動画を用いて表現され，ユーモアセンスあふれたプレゼンテーションを楽しむことができた．まさしく大会のメインテーマ「未来へのTDM」にうまくフィットする内容の講演であった．

教育講演は4演題あったが，特に印象深いものとして，国立成育医療研究センター臨床研究センター治験推進室の中村秀文先生による「小児の薬物動態，用量設定とTDM」が挙げられる．“子どもは小さな大人ではない．低出生体重児・新生児から思春期までの幅広い年齢群が含まれており，その薬物動態は発達に伴う生理的変化の影響を受ける．成人における個人差に加えてさらに発達の要素が加わる．”という理論のもと，小児に対する薬物投与の際に留意すべきことを分かりやすく解説していただいた．また，添付文書における小児に関連した記載事項の乏しさ，そしてその問題点についてもこの講演を聞いて認識を新たにした聴衆は多いのではないだろうか．例えば添付文書上では“点滴静注での安全性は確立されていない”とされている薬物が，実際には点滴静注で投与することが世界標準であること，また添付文書に記載された用量と比較して実際の治療に用いられる用量ははるかに多く，さらに細かい用量設定がなされている，といったことなどである．添付文書の記載をただ鵜呑みにするのではなく，小児における薬物動態の特殊性を踏まえた用量設定に基づき，適正な投与設計を行う必要性を改めて認識することができた．

シンポジウムは3演題開催されたが，そのうち1つのシンポジウムのテーマは「抗MRSA薬のTDM～各種の病態に特有の留意点を探る～」であった．こちらの会場では4名の演者が各病態における抗MRSA薬投与時の留意点を講演されたのだが，会場ホールは両サイドと後方を立ち見の聴衆が取り囲む超満員の状態．聴衆の人いきれと熱い知的好奇心により，体感温度はかなりの上昇を感じた．熱心にメモを取る聴衆も数多く見受けられ，強い関心を窺うことができた．また，「TDM 30年の歩み－そして未来へ－」と題されたシンポジウムでは，日本におけるTDMの歩み，そして今後の方向性について講演がなされた．今後の方向性としてDr. Vinksの講演内容と同様，世界的なPersonalized Medicineの潮流に応え，すでに確立した血中薬物濃度に加えて，遺伝子など薬効に関するバイオマーカーを考慮した「個別化投薬」を目指す必要性を再度認識させられた．

また，本大会に特有のセミナーとして，前回の第26回学術大会（開催地：新潟）から始まったスイーツセミナーは今回も企画され，有意義な講演とともに北海道のおいしいスイーツをいただけるありがたいセミナーであった．今後もぜひ続けていただきたいと思う．他にも多数のセミナーが開催されていたが，立ち見が出るほど参加者の関心を引いた内容も数多くあり，興味のある講演を聴き逃すまいと足早に移動する参加者らで会場内は活気に包まれた．

一般演題はポスター発表のみであったが，110演題が発表された．その発表内容について内訳を見てみると，抗菌薬・抗真菌薬・抗ウイルス薬など感染症治療薬関連の演題が53，抗がん剤関連が14，免疫抑制剤関連が12，抗不整脈などの循環器疾患治療薬関連が9，その他が16であり，感染症治療薬についての関心の高さがうかがえる内容であった．ポスター会場では，示説時間に会場のあちこちで熱のこもったディスカッションが行われた（**写真2**）．

学会の合間には札幌の街を散策したが，その予想以上の暑さに驚いた．梅雨で蒸し暑くじめじめした大阪から，さわやかに晴れた北海道へ移動したはずであったが，なんと北海道は30年ぶりの猛暑であったらしく，あまりの暑さに学会会場に用意されたドリンクコーナーのミネラルウォーターは初日に全てなくなってしまう状態であった．そのような暑さの中，せっかくの札幌を満喫しようと街へ繰り出した筆者であるが，今回最も感激した食事をご紹介したいと思う．それは，「ウニ」である．通常，市場に出回るウニはミョウバンで処理されており，すでに“薬品臭い”味になってしまっているとのことである．今回，殻から取り出し塩水で洗っただけのウニをご飯の上にあふれんばかりに載せられたものを，わさび醤油でいただいたのだが，そのあまりのおいしさに心から驚いてしまった．とろけるような濃厚な甘み，なんの臭みもなく，ただただ甘いだけなのである．「今ま

Presented by Medical*Online

写真2　ポスター会場

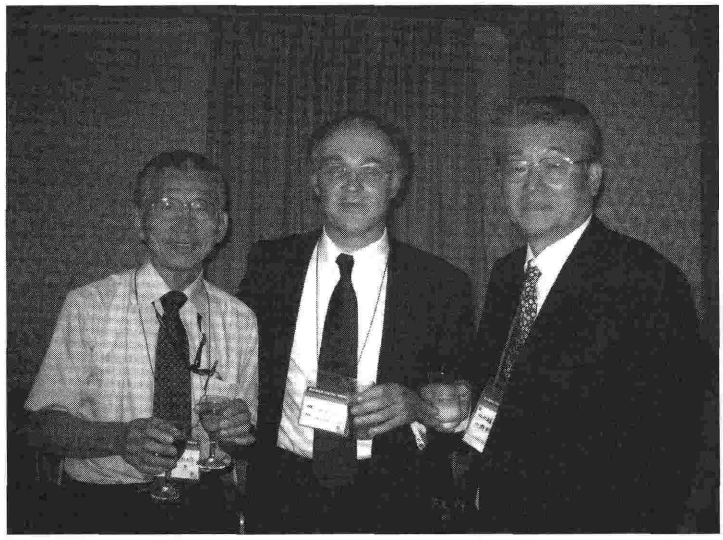

写真3
左より，田中一彦先生，Dr. Vinks，野村憲和学会長．

で食べていたウニは一体何だったのだろう？」というのが正直な感想である．ちょうど6月はウニの旬であり，訪れたタイミングがよかったのだが，ウニ好きの方はぜひ一度ご賞味されてはいかがでしょう．また，いままでウニの独特な風味が苦手だったという方も，ダマされたと思って一度試していただきたい．「本当のウニはこんなに美味しい！」．これは，今回の学会で得られた学術的な知識とともに，筆者にとっては非常に重要な“新知見”であった．

また，筆者は懇親会にも参加したが，会場では北海道の山海の幸とともに学会オリジナルのウイスキーやワインも披露され，参加者はみな有意義な意見交換を行いつつ思い思いに“北海道の味”を楽しんでいた(**写真3**)．

次回の第28回日本TDM学会・学術大会は広島にて開催される．皆様のふるってのご参加をお待ちしています．

Presented by Medical*Online